

カンボジア 工場労働者のための子宮頸がんを入口とした 女性のヘルスケア向上プロジェクト

Newsletter from SCGO-JSOG Project on Women's Health and Cervical Cancer

No. 11 September 2016

工場での健康教育活動始動

当プロジェクトの工場での活動は、工場労働者の意識調査から始まり、5月～7月に派遣されました大石博子専門家がカンボジア産婦人科学会メンバーとともに日本産科婦人科学会の医師のアドバイスを受けて健康教育教材（子宮頸がん検診啓発のリーフレットやパワーポイント）を作成し、そして、工場での健康教室開催に向け、工場の看護師との意見交換や健康教育実施に関するアドバイスをし、準備を進めてきました。

8月26日、29日の二日間、カナル医師（カンボジア産婦人科学会長）およびスン医師（カンボジア産婦人科学会理事）の立会いのもと、Sumi (Cambodia) Wiring Systems Co., Ltd で、工場の看護師による計6回の教室が開催され、700名の工場労働者が参加しました。工員からは多くの質問があり、関心の高さが窺えました。

その後、子宮頸がんのみならず、健康教室での質問や工場看護師の意見を元に、今後の健康教育に必要と思われる家族計画のパワーポイント教材を開発し、工場に提供しました。さらには、カウンセリング等で使用できる子宮頸がん検診啓発に関する紙芝居形式の教材（フリップチャート）を開発し、工場や病院（国立病院、州病院）に配布され、活用される予定です。

「子宮頸がん検診をうけましょう」

8月26日、29日、Sumi (Cambodia) Wiring Systems Co., Ltd の工場で子宮頸がん検診啓発の健康教室が開催されました。参加者は合計700名。館内放送をしてくださったおかげか、日勤のほぼ全員が参加してくださいました。昼休みの食後のひと時を利用して、一日3クラス、多い時はひとクラス150人を超す場合もあり、教室の「ソクサーバイ・スクール」は座る椅子も足りないほど盛況でした。昼休みの30分を使っての健康教育なので、きちんと話が伝わるのか、質問が出てこないのではないかと心配しましたが、時間が足りないほどに質問があり、中には男性からの質問もありました。どのようにこの病気になるのか、どこで検査が受けられるのかなど、子宮頸がんや検診に興味を持てただけのように思えます。今後、工員向けの子宮頸がん検診が実施される予定です。多くの方に受診してもらえたらと思います。

大石 博子

プノンペン経済特区の日系企業への説明会

9月14日、プノンペン経済特区（PPSEZ）の日系企業会合の定例会で、松本安代医師がプロジェクトの説明、特に Sumi (Cambodia) Wiring Systems Co., Ltd における健康に関する意識調査や子宮頸がん健康教育などの活動を報告しました。子宮頸がん検診のリーフレットを今日の会合に参加した30社以上の企業（参加者は約40名）に配布しました。

会合に出席された Sumi (Cambodia) Wiring Systems Co., Ltd 社長より、当プロジェクトと協働することで、工場で働く女性の健康に関する意識が高まったことが報告され、PPSEZ の他の企業も是非 SCGO-JSOG プロジェクトに参加し健康教育を受け、子宮頸がん検診を受けるよう呼びかけて下さいました。

説明会の後、女性の健康に関する教育講座に関して興味を示して問い合わせをくださった工場もあり、今後、PPSEZ の工場における健康教育、そして子宮頸がん検診の実施に向けて活動が広がっていきそうです。



（写真）工場での健康教育の風景



（写真）開発した紙芝居形式の教材（フリップチャート）



（写真）PPSEZ の日系企業連会の定例会で
当プロジェクトの説明

日本産科婦人科学会員の医師による病院視察(病理)

9月4日～9日の間、近畿大学医学部奈良病院より若狭医師が派遣され、カンボジアで病理医が在籍し、診断を行っている病院を視察し、現状把握および情報交換を行いました。

また最終日には、カンボジアでは初めて、カンボジアにいる病理医(カンボジア人、フランス人および日本人)全員が一堂に会し、情報交換や今後のカンボジアの病理医への提言を行いました。

2016年9月4日より10日までプノンペン市内の5病院の病理診断部門を訪問して参りました。癌の診断、治療において病理部門の果たす役割は大きく、特に子宮頸癌前癌病変、早期病変においては病理診断が必須です。しかしカンボジアには定年退職後の医師とフランスから派遣されている医師を含めて7名しか病理医はいません(現役世代は4名)。今回はカンボジアの唯一の国立大学医学部である国立健康科学大学の病理学教室、Sihanouk Hospital Center of Hope, Preah Kossamak Hospital, Khmer Soviet Friendship Hospital, Calmette Hospitalそして国立健康科学大学病理学教室の前教授である Prof. Tan Thanasith が自宅で開業している病理診断科医院を訪問し6名の病理医(1名は留学中)に面会しました。

カンボジアの病理部門に対してはこれまで、フランスと日本が主に援助してきたことがわかりました。フランスのNPOからの病理医師の派遣とともに、これは我々も把握していなかったのですが、日本の防衛医科大学校の病理学第一講座(現 臨床検査医学講座)から10年以上にわたって病理医と検査技師の交流が行われておりました。

いずれの病院も、標本を作製する機械については十分な台数が配置されておりましたが、やはり物資の不足、そして標本作製する技師の技量不足が目につきました。しかし今回訪問した5施設において、最も効率的にラボを運営し、最も美しい標本を作製していたのは、防衛医大が支援していた病院でした。日本からの援助が着実に根付いていることを実感しました。

最も大きな問題は一般の臨床医の標本採取に問題があることと、個々の症例についてのカルテ(病理では病理データベース)が作成されていない点でしょう。カルテ(データベース)なしには、過去の症例(標本)の再検も精度管理も不可能です。今後、カンボジアで子宮頸部早期病変の発見、治療体制を整備して行くにあたっては、データベースを作成して、個々の患者の情報を保管し、産婦人科と病理診断部門で情報を共有する体制も同時に構築していく必要があると感じました。

今回のカンボジア派遣にあたり、同行し、全体の調整をおこなっていただきました松本安代先生、そして今回、このような機会をお与えくださいました藤田則子先生、木村正教授に感謝申し上げますとともに、わずか7名で1国の病理診断を支えているカンボジアの先生方に敬意を表します。

近畿大学医学部奈良病院 若狭朋子



(写真) 病院視察



(写真) 病院で情報収集



(写真) カンボジアにいる病理医全員による会議



(写真) 感謝状授与式後の集合写真

カンボジア人医師の日本での研修

9月23日より当プロジェクトの対象の3国立病院から、4人のカンボジア人産婦人科医が、大阪大学を始めとした日本の大学での研修に参加しています。10月からさらに3人のカンボジア人産婦人科医および病理医が研修に加わり東京で研修を受けます。研修の詳細は10月号でお知らせします。

プロジェクトを取り巻く動き

- 8/19-9/29 : 大石博子専門家(健康教育教材作成)カンボジア派遣
- 9/4-9/9 : 近畿大学医学部奈良病院より若狭朋子医師カンボジア派遣
- 9/4-9/17 : 松本安代医師カンボジア派遣
- 9/17 : PPSEZ 活動説明会